

ケベック文学への誘い^{いざな}

— 多様性にかかれるフランス語 —

French Plurality in Québécois Literature : an Introduction

小倉和子

OGURA Kazuko



ケベック、フランコフォン、静かな革命、
移動のエクリチュール、一言語主義

Québec, francophone, the Quiet Revolution, migrant writing,
unilingualism

Abstract

Originally called French Canadian literature, “Québécois” literature is relatively young. At a time when Francophones were socially and culturally alienated, literature became one of the few means of expressions for those who tried to “survive” in this closed society. Since “the Quiet Revolution” of the 1960s, it has been enhanced by the arrival of other immigrants. The present paper studies some of the most important works to consider the trends of Québec and its literature. Specifically, it will examine Louis Hémon’s *Maria Chapdelaine* (1916), which depicts devout Catholics living in the countryside ; Gabrielle Roy’s *The Tin Flute* (1945), considered to be the first attempt in Québécois literature to describe urban life and specifically the difficult position of Francophones living side-by-side with Anglophones in Montréal ; and Anne Hébert’s *Kamouraska* (1970) or *In the Shadow of the Wind* (1982, prix Fémina), which describe the state of mind of people seeking liberation from their suffocating family life in a closed society.

Québécois literature changed drastically after the Quiet Revolution, as it prospered from the 1967 revision of Canada’s immigration law and from the Québec’s 1977 “Charter of the French language”. In particular, “migrant writing” increased dramatically from this time, as represented by Aki Shimazaki’s *Hotaru* (Firefly) that has won the 2005 Governor General’s Awards, Canada’s most prestigious prize for literature. Here Shimazaki introduces in French various Japanese scenes to examine fundamental and universal questions of humanity, rather than simply to demonstrate their exotic nature.

In North America, Québec’s 7.7 million Francophones, living among 300 million Anglophones, represent an instructive example of a diverse transcultural dynamic society based on unilingualism and ethnic plurality.

はじめに

ケベック文学は若い文学である。20世紀初頭に出版され、日本語も含めて20以上の言語に翻訳されて世界的に有名になった『マリア・シャプドレーヌ』（1916年刊）のような作品があるとはいえ、19世紀中葉以前にさかのぼる作品は少なく¹⁾、しかも、誰もがカナダ文学の筆頭に挙げる『赤毛のアン』（1908年刊）をはじめとする英系文学や、隣国アメリカの文学に比べて、これまでかならずしも日当たりのよいところに位置してきたわけでもない。

とはいえ、フランス語話者（フランコフォン）が現在よりはるかに文化的・社会的に疎外されていた時代には、数少ない自己表現の手段として文学が大きな意味をもっていたのもたしかである。そして、1960年代の「静かな革命」以降、2度の州民投票（1980年、1995年）において主権＝連合派は僅差で敗れるが、連邦政府との交渉では大きな進展が見られたことによって、ケベックの人々は「ケベッコワ」としての自信を獲得するようになる。それまで「生き延びる」ことだけを考えて閉鎖的になっていた彼らは、今では他者を巻き込んで成長していく精神的余裕をもつようになっただけでなく、それが政治的に必要になってきてもいる。本稿では、そのようなケベッコワが生み出した文学作品のいくつかを紹介しながら、今後のケベックとケベック文学がどのような方向に向かおうとしているのかを考えてみたい。

1. 大地を描く文学

1930年代までのフランス系カナダ文学では「大地」が主要なテーマだった。1759年、アブラハム平原での英仏の戦いでフランスが敗れ、ヌーヴェル・フランスがイギリスの植民地となったことは、フランス系の人々に忘れることのできない心の傷を残す出来事だった²⁾。その後、アメリカの独立戦争を契機として、ロイヤリスト（英国王派）が続々とカナダに亡命してきて³⁾、19世紀の中頃には人口的にも英語話者（アングロフォン）が多数派となる。都市化も進むが、都会に出ていけば、フランコフォンはアングロフォンの「ボス」の下で働かなくてはならない。しかし、農村に留まって自分たちの土地を耕しているかぎりには英系から指図を受けることはないし、フランス語を守ることもできる。かくして、フランス系はひたすら守りの姿勢にはいつていたのである。文学作品は、土地を開墾して農業を営み、カトリック教会の教えを守りながら生活する人たちの姿を好んで描き出した。そのような作品群は「郷土小説（romans de la terre）」と呼ばれる。

「郷土小説」の代表作といえば、やはりルイ・エモン（Louis HÉMONT, 1880-1913）の『マリア・シャプドレーヌ』である。この小説は残念ながら、生粋のカナダ人ではなく、ケベックに一時滞在していたフランス人によって書かれたものだが、外部からの視線であるだけにいっそう、当時のフランス系カナダ人の生活が活写されている。作者が1913年に鉄道事故で死亡した翌年、まずパリの日刊紙『ル・タン』に連載され、その後1916年にモントリオールで単行本として出

版されるが、21年にフランスで再版されたことによって爆発的な成功をおさめた。

舞台は、ケベック市から200キロ以上北に行ったサン＝ジャン湖の周辺。セントローレンス河から西にサグネと呼ばれるフィヨルドを上っていくとサン＝ジャン湖に出る。主人公マリアの父親は典型的な開拓者魂の持ち主で、土地を開墾してはそこを他人に譲り、自分はさらに奥地を切り開いていくのをやめられない質の人である。小説の中には、雪解けと同時に始まる開墾作業、教会でのミサ、夏のブルーベリー摘み、キリスト降誕祭など、四季折々の村人たちの生活ぶりが生き生きと描かれている。

敬虔なカトリックの名前をもったマリアは適齢期の娘で、彼女の周りには3人の求婚者が現れる。フランソワ・パラディは、森を駆けめぐっては、インディアンたちが捕まえた動物の毛皮を毛皮商人に売る仲介人である。ロランゾ・スルプルナンは、気候条件の厳しいカナダを捨ててアメリカの都会（マサチューセッツ州）で働いている。マリアはフランソワのほうに惹かれているが、彼は、クリスマスに一時帰省する途中、森の中で吹雪に遭い、道に迷って凍死してしまう。失意のどん底に落ちたマリアは、恋人を奪った厳しい自然を恨むようになり、一時は、ロランゾについてアメリカに行ってしまうか、とも考える。

そこに現れるのが3番目の求婚者、ウトロップ・ガニヨンである。彼はマリアの父と同じ開拓者である。恋人を失ったマリアにとって、問題はもはや、どちらの男性を選ぶかではなく、「ここに留まるか、それともよそに行ってしまうか」である。そんなとき、突然、母親が病死し、マリアの揺れる心に、啓示のように「ケベックの土地の声」が聞こえてくる。

小説の最後の場面で、マリアは窓辺に腰をおろしてぼんやり物思いに耽っている。母と同じように、この土地で生きていこうか。それとも、恋人の命を奪った憎らしい土地など捨てて、遠くのまだ見ぬ大都会に行ってみようか。けれども、そこはフランス語を話す人たちの国ではない……。そのようなことをあれこれ考えていると「第3の声」が湧きおこってくる。「我々は300年前にここへやってきて、住みついた。(……)ここケベックの地にあっては、すべてが昔のまま、これからも変わるまい(HÉMON, 1997, p.193-194)。」この声を聞いて、マリアはウトロップと結婚してここに残留する決意を固める。

「郷土小説」はこのように、華やかな都会での安楽な生活の誘惑を払いのけ、自分たちの土地に留まり、フランス語を守り続けようとする人々を描くのである。

2. 都市を描く文学

ところが、1945年に発表されたガブリエル・ロワ（Gabrielle ROY, 1909-1983）の『束の間の幸福』は一転して、近代化が進むモントリオールで生活するフランス系労働者の現実を見つめた、きわめて写実的な小説である。この作品はケベック文学が初めて都市を描いた作品だとされる。描かれているのは第2次世界大戦のただ中（1940年）の、サン＝アンリというフランス系労働者たちが住む界隈である。

主人公のフロランティーヌは世界恐慌のあおりで失業中の父親に代わって、大衆食堂のウェイトレスとして受け取る薄給で、両親と兄弟7人を養っている。彼女は食堂に来る客の一人である修理工のジャンと恋に落ちる。若い身空で健気に家計を支えてきたとはいっても、所詮は安物の恋愛小説を読んで恋に恋する世間知らずの乙女にすぎない。ところがジャンのほうは、孤児として育ち、今は修理工として働いているが、いつかは自力でこの境遇から抜け出してやろうと目論んでいる上昇志向の強い青年である。フロランティーヌのことが気にはなるが、同じ階層の娘と付き合っても時間の無駄でしかないことを知っている。そこで、唯一の友人であるエマニュエルに彼女を押しつけて、自分は身を引こうとする。一方のエマニュエルは、フランス系の中では比較的裕福な家庭に育った青年で、フロランティーヌを紹介されると、一目で気に入りに、自宅で催すダンスパーティーに彼女を誘う。知り合っただけの2人だが、ダンスでの呼吸はぴったりで、お人好しのエマニュエルはもう、「僕は君と一晩中踊るよ、ねえフロランティーヌ、君と一生踊るんだ (ROY, 1996, p.137)」などと、求婚の言葉とも取れそうなことを口にしていく。

けれども、フロランティーヌは、ダンスパーティーのあと食堂にぱったり姿を現さなくなってきたジャンのことが忘れられず、ついに職場まで押しかけてしまう。そして、ジャンは彼女の巧みな誘いに乗せられて、家族が留守中の彼女の家をたずね、2人は過ちを犯してしまう……。

第2次世界大戦が始まり、エマニュエルは軍隊に志願する。フロランティーヌはたった1度の過ちでジャンの子どもを宿していることに気づくが、母親にも女友達にも打ち明けられずに1人で思い悩む。さらに、弟の病気やアパートの立ち退き命令など、彼女の周りには次々と不幸が襲いかかる。

休暇で一時帰宅したエマニュエルがフロランティーヌを訪ねてきたのはそんなときだった。2人で散歩しながら、「戦争が終わるまで待っていてくれるかい?」というエマニュエルの求婚の言葉に、「そんなに待てないわ。(……) だって、あなたが別の女の子たちと親しくなってしまうなにか心配なもの」と、フロランティーヌは「か弱い女の持てる力を総動員して」(ROY, 1996, p.353) 答える。世間知らずだった彼女も一連の試練から学習しており、これが自分と生まれてくる子どもが幸せになるために残された唯一の方法だということを悟ったからだ。2人は婚約し、あわただしく結婚式を挙げて、エマニュエルはヨーロッパ戦線へと赴く。このときフロランティーヌは19歳、エマニュエルは22歳。彼の貯金で、フロランティーヌだけでなく、彼女の家族全員がようやく金銭的労苦と劣悪な住環境から解放される。これで、たとえエマニュエルの身に万一のことがあっても、戦争未亡人としての年金で一生暮らすことができるだろう。

この小説は、メロドラマ風でありながら、主人公を取り巻くフランス系住民の労働条件、住環境、家族関係、英系住民との格差、迫りくる戦争、さらには未婚の女性の妊娠など、さまざまな重い社会的テーマに取り組んだ作品である。1960年代に始まる「静かな革命」以前のフランス系の人々は、じつに多くのものに束縛され、「囚われの身 (RICARD, 2001, p.60)」になっていた。フロランティーヌは、そこからほんの一步抜け出すことに成功した娘である。彼女は、恋に恋して過ちを犯すが、さんざん苦しみながらも、幸せになる権利を最後まで放棄せず、自分に与えら

れうるおそらくは最高の幸福（たいして大きいわけではないが）—エマニュエルの穏やかな愛情や、金銭的な安心感、物質的な快適さなど—を手に入れることができた。フロランティーヌは、「静かな革命」以前の宗教的倫理観からすれば罰せられても不思議ではない娘だが、ロワは彼女に「やり直し」の可能性を示唆している。このあたりが、おそらくこの小説の成功の秘密だったのでないだろうか。

作品は出版の翌年、1946年にフランス系カナダ・アカデミー賞を受賞。47年には *The Tin Flute* というタイトルで英訳され、英系カナダやアメリカにも多くの読者を獲得し、ついにはフランス本国で再版されてフェミナ賞を受賞した。『束の間の幸福』は、60年代に始まる「静かな革命」以前のケベック社会で「囚われの身」になっていたフランス系住民が己の姿に気づき、来るべき社会変革を準備するうえで重要な役割を果たしたと言われている。

3. 自らを回想する文学

ロワはしかし、この作品以降、社会派小説から一転して自伝的色彩の濃い作品へと向かう。『デシャンボー通り』（1955年刊）や『アルタモンへの道』（1966年刊）は、話者クリスティーヌが少女時代の出来事を語る、瑞々しい感性とユーモアにあふれた作品である。ロワはじつはケベック州生まれでも、モンリオール育ちでもなく、マニトバ州の出身だった。若い頃、イギリスやフランスに演劇の勉強に出かけ、カナダに戻ってからはモンリオールでジャーナリストとして仕事をしながら小説を書くようになったが、ヨーロッパに出かける前、故郷のマニトバで小学校教師をしていた。そこにはフランス系住人の小さなコミュニティがあり、イタリア、ポーランド、ウクライナなどからの移民も混じっていた。赴任したての若くて情熱的な教師と、さまざまな困難を抱えながらも懸命に生きる子どもたちとの心の触れ合いを描いた自伝的小説『わが心の子らよ』（1977年刊）は、カナダ文学における最高の榮譽である総督賞も受賞した感慨深い作品である。

さらに、1984年に死後出版された自伝『苦悩と歓喜』こそは、ロワの最後の作品にして最高傑作とみなす人も多い。ロワの小学校時代、マニトバ州では2言語教育が廃止され、フランス系住民に対する圧力が強まっていった。父親は移民局で働く中流階級であったが、それでも母親と一緒にイートン・デパートで買い物をするときに店員にフランス語で話しかけることは途方もない勇気が必要とすることで、子供心にも、「英語の海の真ん中」で二級市民の子であることを常に意識させられながら少女時代を過ごした。自伝には、そのころから、ヨーロッパでの演劇修行の時代を経てモンリオールでジャーナリストとして仕事を始めるまでの時代が、繊細な語り口で語られている。『束の間の幸福』で現実社会にいわば外部から透徹した視線を投げかけたロワは、以後、その具体的証言として自らの過去を差し出したかのようだ。彼女の作品はほとんどいつもただちに英訳され、ケベックだけでなく、カナダを代表する作家として、今なお多くの読者や研究者を獲得している。

4. 内面世界を掘り下げる文学

アンヌ・エベール (Anne HÉBERT, 1916–2000) はロワと双壁をなすケベックの作家である。ロワより7歳年下の彼女は1942年に処女詩集『釣り合った夢』、ついで1953年に『王たちの墓』を発表し、ケベックを代表する詩人としての地位を固めた後、小説を書き始める。

1960年代から彼女はパリとケベックを往復するようになり、次第に活動の拠点をパリに移すことになる。1970年にパリのスイコ社から出版された『カムラスカ』はエベールの名をフランス語圏全体に知らしめた小説である。カムラスカはセントローレンス河畔に位置する実在の村で、時代設定は19世紀中葉。主人公のエリザベットは恋を知らぬままに、親に良縁だと勧められて、この若い領主アントワーヌ・タシのもとに嫁ぐが、後になってから夫の奇行や暴力を知り、親切的なアメリカ人医師ネルソンと不倫の末に、夫の殺害計画に加担してしまう。

殺害後、ネルソンは国境へ逃げ、彼女だけが出廷させられるが、免訴となり、名誉を救ってくれた高齢の弁護士ジェローム・ロランと再婚して、ケベックで貞淑な妻を演じている。事件から18年後、病に臥せった夫の介護をしながら、仮眠中の彼女の脳裏には、少女時代のこと、前夫との不幸な結婚生活、ネルソンとの道ならぬ恋、殺害の光景など、さまざまなシーンが去来する。

小説の最後、エリザベットは夫が「終油の秘蹟」を受けたと聞いて、涙を拭う。

ロラン夫人は目を伏せる。頬の一滴の涙を拭き取る。

突然悪夢が再び吹き込み、エリザベット・ドーニエールを嵐のように揺さぶる。それでも外見には何も現れない。模範的な妻は、シーツの上の、夫の手を握っている。だが……。不毛の畑の、石の下から、遠い、野生の時代の黒い、生きた、一人の女が掘り出された。その女は不思議に生きたままだった。(……) あんな昔に、生き埋めになったのだから、この女の生きようとする飢えは、何世紀もの間、土の中で蓄積されて、さぞかし狂暴で、絶対的なものに違いないと、人はそれぞれ考えているのだ！(アンヌ・エベール、1976、p.263–264; 原著 HÉBERT, 1970, p.250)

生にたいする秘められた欲求が噴出するすさまじい場面である。思い出を心の中に葬ったまま、再婚して貞淑な妻を演じている彼女の心の内には、じつは今も、遂げられることのなかった恋のために嵐が吹きすさんでいる。頬を伝う涙は、間もなく息を引き取ろうとしているお人好しの夫のためではなく、今しがたまで見ていた夢、すなわちネルソンにたいする道ならぬ恋の思い出にたいして流されているのである。彼女の外見と内面のあいだの落差は計り知れず、埋葬されたはずの過去がしぶとく生きつづけて、地下から頭をもたげようとしている。

『カムラスカ』は1973年に、ケベックを代表する映画監督クロード・ジュトラ (Claude JUTRA, 1930–1986) の手で映画化され、アンヌ・エベール自身もシナリオ作成に協力している。映像的にきわめて美しい作品で、とくにネルソンがカムラスカまで往復600キロの雪原を馬車で走り、

領主のアントワヌ・タシを殺害しに行く場面は見事である。

一方、1982年に発表されたフェミナ賞受賞作品『シロカツオドリ』は、200年前にアメリカの独立戦争を逃れて移住してきたロイヤリストたちの子孫がひっそりと暮らす、セントローレンス湾に臨む架空の小村で繰り広げられるサスペンス仕立ての小説である。1936年のある夏の晩、年ごろの二人の娘オリヴィアとノラが突然浜辺から姿を消す。2か月後の嵐の翌日、ノラの死体は海岸に打ち上げられるが、オリヴィアは行方不明のまま。小説の各章は、この村の主要人物たち（牧師のニコラ・ジョーンズ、父親に勤当され、5年間北米大陸を放浪して一時帰郷した青年スティーヴンズ、彼の弟ペルスヴァル、そして失踪した二人の娘）による回想と証言によって構成されているが、そこには全体を統括する視線がない。記憶の曖昧な部分や故意の言い落とし、さらには時系列的な混乱も多く、読者に解釈の努力を要求する。しかし、海鳥の甲高い鳴き声や荒れ狂う嵐などの外界描写と登場人物たちの内面との照応関係を描き出す手法には、詩人でもあるエベールの資質が存分に発揮されている。以下はスティーヴンズが米国放浪中に知り合ったマイケルに宛てた手紙の一節である。

だけど君に嵐のことを話さなくちゃならないね。3日間つづいた、ばかでかいやつさ。ああ、なんて楽しかったことか。川という川が氾濫して、橋や家が押し流され、木々は折れ、砂浜は荒らされて、栈橋が根こそぎにされた。新聞が報道するのはそのことばかり。長いあいだ大しけの海を見つめていたら、次第に陶酔感のようなものに取り憑かれていって、自分が熱に運び去られる1本の藁くずになっていったのをぼんやりと覚えている。それと同時に、風雨の猛威に伴奏するようにして、歌のようなものがぼくの血管の中に生まれてきたんだ。ほとんどずっと浜辺で過ごしていたよ。風みたいに気がふれて、自由だった。口や鼻で、風のように快活で力強い大きな息を吹きかけた。ぼくが知っている陶酔は酒とは関係なかった。少なくとも最初はね。(HÉBERT, 1982, p.101-102.)

村の住人全員が1782年にアメリカの独立戦争を逃れて移住してきた一組の男女の子孫であり、「息をしても聞かれ、小指1本動かしても隣人に知られてしまう (HÉBERT, 1982, p.30-31)」ほどの閉鎖的な空間において、まるでそこに蓄積された負のエネルギーを解き放つかのように荒れ狂う嵐。若者は浜辺で雨風を体中に浴びながら、そこに「わが生命の表現、もっとも秘かなわが暴力の表現を見出し (HÉBERT, 1982, p.102)」、陶酔感を味わう。

エベールはある意味で、ロワとは対照的な作家である。活躍した時代こそほぼ同時代だが、身の周りの現実を写実的にとらえるというよりは、内面世界を掘り下げていく心理小説の作家である。また、母方から貴族の血を引いている彼女が取り上げるのは、貧困とは無縁の社会階層であることが多い。とはいえ、「囚われの身」であるのはなにも経済的弱者ばかりではなく、伝統的社

会における男女の精神的抑圧、内面の葛藤、解放への欲求を主題としているという点で、二人には共通点も多い。ロワ自身、『束の間の幸福』以降、自伝的作品に傾倒していったことを考えれば、英系住民に支配された都市部でフランス系の人々が現実社会を向き合うことがいかに困難だったか、想像に難くない。エベールの特徴は、そうしたテーマを、小説空間の緻密な構成や実験的要素に大きな関心を払いながら取り上げた点にあり、その点では、フランス本国の文学潮流により敏感だったといえるのではないだろうか。

5. 越境する文学

以上、駆け足ではあったが、ケベック現代文学の原点に位置する3人の作家を中心に見てきた。ロワやエベールはケベック文学の中で最初に名前が挙がる作家だが、おそらくその資質だけでこれほどの名声を得ることはなかっただろう。ロワの場合、『束の間の幸福』の成功によって、英系カナダやアメリカに多くの読者を獲得したことを見逃すことはできないし、エベールも、60年代以降、ケベックとパリの間を往復することが増え、作品の大半がパリの大手出版社スユウから出版されているということが、世界的知名度を上げるのに功を奏したことは否めない。ルイ・エモンの『マリア・シャブドレーヌ』もまたしかり。ケベックを舞台にし、ケベック特有の語彙や表現が多用されてはいるものの、フランス人によって書かれ、フランスで出版されたからこそ、この小説は早い時期から世界中で翻訳される機会を得たのである。1934年にはフランスの映画監督ジュリアン・デュヴィヴィエ (Julien DUVIVIER, 1896-1967) の手で映画化され、かのジャン・ギャバン (Jean GABIN, 1904-1976) がフランソワ・パラディ役を、マドレーヌ・ルノー (Madelaine RENAUD, 1900-1994) がマリア役を演じ、さらに2年後には、この映画がハリウッドでホーム・シアター化されたことも、作品の宣伝効果としては絶大だったはずである⁴⁾。その意味で、ケベックは、アブラハム平原での戦いで自分たちを見捨てたフランスにたいして怨嗟の思いを抱きつつも、長いあいだ、自分たちの言葉と文化を「守る」ために、その後ろ楯を必要としていたし、また、英系カナダや隣国アメリカとは異なる価値観で自己のアイデンティティを規定しようとはしても、その絶大なメディアの力に依存してきたことも否定できない。それでは、現在のケベック文学の状況はどうだろうか。

そのことを考えるときに重要なのは、1977年に制定された101号法(フランス語憲章)である。カナダ政府は1967年に移民法を改正して、差別的移民制限を撤廃する。そして1977年にはケベック州がこの「フランス語憲章」を制定する。この2つの法律はケベック文学にどのような影響を与えたのだろうか。

それまでケベック州では住民の8割(600万人)がフランコフォンであるにもかかわらず、フランコフォンの権利は大きく制限されていた⁵⁾。しかし、この「フランス語憲章」によって、英仏2言語を公用語とするカナダの中でケベック州だけはフランス語のみを公用語とすることになり、

ケベック社会がドラスティックに変化することになる。それまで、英語はボスの言葉で、フランス語は労働者の言葉だったが、社員 50 名以上の企業ではフランス語が仕事の言語と定められ、町の看板からも英語が排除されることになる。英語の学校に行くことができるのは、両親のうちのどちらかがケベック州で英語による初等教育を受けた子供に限定され、法律と裁判の言語もフランス語だけになる。その結果、大企業のトロント移転に拍車がかかり、約 20 万のアングロフォンがケベック州から転出したが、そのあとにフランコフォンが転入し、逆に発展することになる⁶⁾。

フランス語 1 言語主義は、「英語の海」である北米大陸にあってあまりに極端と思えなくもないが、そこまでしなければ現在のケベックはなかった、というもたしかである。法律の適用はその後より緩やかになり、現在のケベック州では仏英両言語で書かれた看板が一般的だし、モンリオールのような大都市では英語やその他の言語が聞かれることも日常的である。しかし一方で、この法律によって、英語が母語の子弟以外の新しい移民の子どもたちはすべてフランス語の学校に通うことになった。その結果、フランス語はそれを母語とする者たちだけで純粋なまま、しかし細々と生き残るのではなく、外から来た人たちを巻き込み、増殖していくことになる。さまざまな移民や彼らの文化に開かれつつ、表現はフランス語 1 言語による、という緩やかな統合を目指すことになる。そして実際、80 年代以降、多くの移民たちがフランス語で書きはじめる。中でも、中国系のイン・チェン (Ying CHEN, 1961-) や日本のアキ・シマザキ (Aki SHIMAZAKI, 1954-) ⁷⁾ は非常に注目されている作家である。

アキ・シマザキは 2005 年に『ホタル』でカナダ総督賞を受賞した、今やカナダを代表する作家であるが、彼女が 1999 年に発表した処女作『椿』は、きわめて簡素なフランス語で書かれているが、戦争、原爆、父親殺しといった重いテーマを真摯に掘り下げた作品である。母親を亡くして間もないナミコという女性 (海外に住む日本人という設定) が、母ユキコの遺書で重大な告白をされる。それまで、ユキコの父親は長崎の原爆で亡くなったとされていたが、実は父の不倫を知ってしまったユキコが毒殺を試み、その直後に原爆が投下されて、結果的に犯罪がもみ消されたことを知るのである。シマザキはそこで、父親殺しという行為を、戦争や原爆といった人類が行ってきた残忍な行為と重ね合わせ、人間の狂気について考えていく。フランス語で書かれ、ケベックで出版されてはいるものの、とりたててケベック文学に組み込まれる理由はなさそうに見える作品である。強いて言えば、ナミコは現在「海外」に住んでいて、それが (明示はされていないが) ケベックかもしれない、という程度である。しかし、現在のケベック文学では、このように文化的に多様な背景をもった作家たちが、時空を越えた人類の普遍的な問題を積極的に取りあげているのである。

この他にも、イタリア系のマルコ・ミコーネ (Marco MICONE, 1945-)、ハイチ出身のエミール・オリヴィエ (Émile OLLIVIER, 1942-2002)、ユダヤ系のレジーヌ・ロバン (Régine ROBIN, 1939-)、ブラジル系のセルジオ・コキス (Sergio KOKIS, 1944-)、アラブ系のアブラ・ファルード (Abla FARHOUD, 1945-) など、さまざまな出自の作家たちが新しい文学領域を切り拓いている。国を追われるようにして到着した者、ヨーロッパを経由して辿り着いた者、より大きな表現

の自由やより多くの読者を期待してやって来た者など、ケベックを選んだ理由は多様だが、教育職や研究職に就いている者が多いところを見ると、作家活動と両立する職業を求めて、という理由も無視できないようである。彼らが書いたものは「移動のエクリチュール *écriture migrante*」と呼ばれることもある⁸⁾。境界を易々と超えて自由に移動し、他と交わり、豊かになっていくのは、書き手だけではなく、作品も同様である。

このように、アングロフォンの社会にたいして自らを閉ざし、ひたすら守りの姿勢にあったフランコフォンは、「静かな革命」や「フランス語憲章」を経て、多様性を包み込みながらフランス語を核として緩やかに統合していくという姿勢に変わってきている。EU（欧州連合）は言語の統合を伴わない政治的・経済的共同体を目指しているが⁹⁾、ケベックはそれとはまた一味ちがったかたちで、きわめて先進的な共同体の1つのモデルを提示しているのではないだろうか。80年代以降、各国に置かれたケベック州政府事務所を通して独自の外交を繰り広げ、自律性を高めてきたケベックは、さまざまな文化支援政策の一環として、出版助成にも力を入れており、今やアングロフォンやフランスに頼らずに世界に発信し、読者・研究者網を広げはじめている¹⁰⁾。その意味で、今後のケベック文学の動向は非常に興味深い。

おわりに

20世紀初頭に発表された、ケベック現代文学の原点である『マリア・シャプドレーヌ』を振り返った後、『静かな革命』前後に活躍した二人の作家、ガブリエル・ロワとアンヌ・エベールを紹介し、現在の状況までを概観した。じつは、ケベック文学では詩や演劇にも見るべきものが多いのだが、それについては稿を改めて紹介したい。

ケベック社会は、1763年にヌーヴェル・フランスがイギリスの植民地になったために、フランス革命を経験せずにフランスから切り離され、その後1960年代の「静かな革命」までいわば旧制度アンジャン・レジームが続いたようなものだ、といわれることがある。言葉とカトリック教会と教育制度がスクラムを組んで「生き延びる」ことに必死だったし、実際、このスクラムのおかげで自分たちの言葉と文化を「守る」ことができたのである。そこには、歴史の偶然も関与していて、13州植民地（アメリカ）との衝突が不可避になったイギリスが、ケベックの加担を怖れて懐柔策を取ろうとし、1774年、ケベック法を制定してフランス系文化の存続を公認したとことも大きい。しかし、第2次大戦後の都市化にカトリック教会の力が抗しきれなくなると、伝統的社会構造は一気に崩れ、1960年代の「静かな革命」に突入する。都会生活の中でアングロフォンとじかに接触する機会が増えると、言葉への意識は一層高まり、ケベックワとして目覚めることになる。近代社会を実現した途端にポストモダンの多文化状況に突入した、というのもケベックの特徴である。

2008年はケベック市創設400周年にあたった。フランス人探検家サミュエル・ド・シャンプラン（Samuel de Champlain, 1570頃-1635）が「狭い水路」を意味するケベック市を建設したのは1608年のこと。ケベックで盛大に祭典が行われたのは当然だが、日本でも10月1日には東

京ディズニーリゾートにシルク・ドゥ・ソレイユの常設劇場が開設され、その直後に日本ケベック学会が設立された。

3億の英語話者が住む北米大陸の一角で、770万人のフランス語話者が住む「島」がこれほど活気に満ちているというのは、偶然が幸いしたことはたしかでも、それだけではなく、ケベックワたちがさまざまな局面で行ってきた状況判断や政治的選択の結果なのである。カナダは、ケベックワの抵抗があったからこそ、アメリカ合衆国とは一線を画して、英・仏を超えた多文化主義や人権などの価値観を社会的に実現してこられたともいえる。ケベックは、人々の言葉と文化への愛着、そしてそれらの共存について考える際に、私たちに多くのヒントを与えてくれる地域なのである。

*本稿は明治大学政治経済学部がケベック州政府在日事務所の助成を受けて開講している連続講座「現代のケベック」において2008年11月に筆者が担当した「ケベックの文学」を改稿したものである。

注

- 1) わずかにあるのは、Patrice LACOMBE, *La Terre paternelle*, 1846, など。
- 2) 《Je me souviens (私は忘れない)》は車のナンバープレートなどにも記されたケベック州の標語だが、忘れられない出来事の最たるものがこのアブラハム平原での敗北である。
- 3) 1783年までに、約5万人が現在のカナダに移住。
- 4) 困みに邦訳『白き処女地』も1935年刊。
- 5) 1969年、連邦政府の公用語法によって、英・仏2言語がカナダの公用語として保障されたが、現実の格差を是正するには十分ではなかった。
- 6) Charte de la langue française - Repères et jalons historiques, <http://www.olf.gouv.qc.ca/charte/reperes/reperes.html> (2008,11,05) 参照。
- 7) 岐阜県生まれ。1981年にカナダに移住し、1991年からモントリオールに在住。
- 8) Robert Berrouët-Oriol の表現。《écriture》は言うまでもなく、「書く行為」や「書かれたもの」を指す。《migrante》は「移動性の」というほどの意味ではあるが、もはや、流入や流出を示す im- や é- といった接頭辞はついていない。
- 9) 現在27カ国の加盟国の23の公用語すべてをEUの公用語としている。
- 10) 世界のケベック研究者のネットワークであるAIEQ (=Association internationale des études québécoises) の会員数は2008年現在で1330名。

参考文献

- HÉBERT Anne (1942) *Les Songes en équilibre*, éd. de l'Arbre, Montréal.
 —. (1953) *Le Tombeau des roi*, Institut littéraire du Québec, Montréal.
 —. (1970) *Kamouraska*, éd. du Seuil, Paris.
 アンヌ・エバール (1976) 『顔の上の霧の味』(朝吹由紀子 訳) 講談社。

- HÉBERT Anne (1982) *Les Fous de Bassan*, éd. du Seuil, Paris.
- HÉMON Louis (1916) *Maria Chapdelaine*, éd. J.-A. Lefèvre, Montréal.
- . (1921) *Maria Chapdelaine*, éd. Grasset, Paris.
- ルイ・エモン (1935) 『白き処女地』(山内義雄 訳) 白水社。
- . (1974) 『白き処女地』(池田公麿 訳) 旺文社文庫。
- HÉMON Louis (1997) *Maria Chapdelaine*, Bibliothèque québécoise.
ケベックインターナショナル (ケベック州政府代表事務所)
<http://www.gouv.qc.ca/portail/quebec/international/japon/quebec/>
- MONTGOMERY Lucy Maud (1908) *Anne of Green Gables*.
- 日本カナダ学会編 (1997) 『史料が語るカナダ』有斐閣。
- 長部重康・西本晃二・樋口陽一 編著 (1989) 『現代ケベック — 北米のフランス系文化』勁草書房。
- 小畑精和 (2003) 『ケベック文学研究』御茶の水書房。
- PROVENCHER Serge (2007) *Anthologie de la Littérature québécoise*, éd. du Renouveau Pédagogique.
- RICARD François (2001) *Introduction à l'œuvre de Gabrielle Roy (1945–1975)*, Nota bene, coll. 《Visée critiques》.
- ROY Gabrielle (1993) *Rue Deschambault*, Nouvelle édition, Boréal.
- . (1993) *La Route d'Altamont*, Nouvelle édition, Boréal.
- . (1996) *Bonheur d'occasion*, Nouvelle édition, Boréal.
- . (1996) *La Détresse et l'Enchantement*, Boréal.
- ガブリエル・ロワ (1998) 『わが心の子らよ』(真田桂子 訳) 彩流社。
- ROY Gabrielle (2005) *Ces enfants de ma vie*, Nouvelle édition, Boréal.
- 真田桂子 (2006) 『トランスカルチュラルリズムと移動文学』彩流社。
- SHIMAZAKI Aki (1999) *Tsubaki*, Leméac / Actes Sud.
- アキ・シマザキ (2002) 『椿』(鈴木めぐみ 訳) 森田出版。
- SHIMAZAKI Aki (2004) *Hotaru*, Leméac / Actes Sud.